

善隣

No.483 通巻750

2017年(平成29年) 9月1日発行(毎月1日発行)

2017

9





7月14日“暑気払い”



最後に「青春時代」を熱唱

善 隣 目 次 2017年9月号

歴史の中の習近平政権 —注目の共産党大会を控えて	高原明生	2
武漢取材ノート 変化といふ浪に押される内陸経済	竹内健二	10
中国ウォッチング	編・訳 上松玲子	18
新刊紹介		
矢吹 晋著『習近平の夢』 —台頭する中国と米中露三角関係	田畑光永	20
旅行記		
台湾紀行	阿部靖夫	22
海南航空で行く北京旅行記	村田嘉明	24
コラム 腰折れ文 一、	渡邊澄子	28
陶陶俳壇	馬場由紀子選 / 戸部 守	29
常任委員会報告		30
協会通信		31
会員だより・同好会だより		32
みんなの写真館		32
2017年9月の行事予定		33
原稿・写真など大募集		28

— 善 隣 第 483 号 通巻 750 号 —

2017 年 9 月号

2017 年 (平成 29) 年 9 月 1 日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋 1-5-5

一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03 (3573) 3051

FAX 03 (3573) 1783

発行人 矢野一彌

印刷所 〒162-0814 東京都新宿区新小川町 4-17

有限会社ひまわり印刷

TEL 03 (3235) 1488

定 価 一部 400 円 年額 4,800 円

振 替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

© 禁無断転載

歴史の中の習近平政権

— 注目の共産党大会を控えて

東京大学大学院教授・協会学術顧問 高原明生



ポスト毛沢東時代の 終わりの始まり

中華人民共和国に限らず、中国史の長い文脈の中で見ると、政治体制の在り方として皇帝型の指導者がでるものだという見方がある。その見方からすれば毛沢東だけでなく、蒋介石もそうだが、ストロングマンが出て統治をおこなうのは中国の当然の姿ということになる。

毛沢東は文化大革命を発動し、大動乱をもたらしてから世を去ったが、それに懲りた鄧小平とその仲間たちは、権力の濫用を防止するために集団指導体制を始めた。しかし、今、紹介した見方によ

れば、実はこちらの方が中国の歴史から見れば異常なことであって、また毛沢東に戻る、皇帝型に戻るのは自然だということになる。

そして習近平が現在、していることはそれだということになるが、他方では、それはうまくいかないだろうという見方もある。つまり、今は21世紀であり、1人の人間に権力が集中するのではどうしても間違いや非効率が発生しやすくなる。複雑な事象のすべてについて超人的な判断力を備えている指導者はいないだろうし、意思決定もすばやくはできないだろう、という見方である。

ただいづれにしろ、習近平が目指しているのは、自らに権威と権力を集中した

毛沢東型の抜きんできた指導者であることは間違いない。後述するように、党大会を前にした7月になって、いよいよ「習近平思想」という言葉が党の刊行物に登場した。そして党主席制まで復活することになれば、集団指導体制は名実ともに解消され、ポスト毛沢東時代が終焉すると言って過言ではないだろう。

しかし、皇帝型権力が中国の歴史では常態だとしても、なぜ現代でもそうでなければならぬのか、という疑問はわく。それについては、鄧小平にしても共産党の独裁権力を手放そうとはしなかったことを思い起こすべきだろう。今や毛沢東が率いた中国革命は日々に遠く、共産党だけが統治権を握り続ける



毛沢東

ことの正統性はほとんど存在しない。腐敗し、権力のチェック・アンド・バランスが効かない共産党が不人気なことは、彼ら自身よく知っている。いまは代替組織が見当たらないが、将来、多党制が実施されれば、彼らは権力を失う可能性がある。だから独裁的な権力を手放せないことは指導的幹部のコンセンサスであるはずで、その前提のもとでどう統治するかという選択になる。権力維持のための選択肢として、集団指導体制を継続するのか、それとも皇帝型に戻るのか、どちらを選ぶのが現在の争点となっ



鄧小平

いる。

民主化への道

他方、同じく大陸で政権を握っていた国民党は台湾に移ってから40年近く一党支配体制を維持したが、80年代後半より多党制に移行し、選挙で指導者を選ぶ道に進んで、現に政権交代も行われている。このことをどう考えるか。

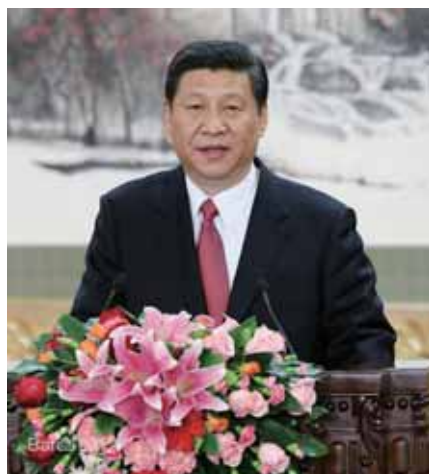
ひとつには、孫文の三民主義の効果が認められる。すなわち、軍の独裁である軍政から訓政、つまり権威主義体制に移行し、いずれは憲政へと政治体制が進化していくという考え方に基つき、戒厳令下であっても、国民党は訓政段階に行われるべき憲政への移行準備として地方自治を実施した。これがいわば将来の民

主化への訓練となった側面がある。

さらには、若林正丈教授の説だが、政権の正統性を内部の正統性と外部の正統性に分けて考える説明もある。国民党政府の場合、1970年代に国連における中国代表の座を実質的に共産党政府に奪われた上、アメリカや日本などの国交がなくなり、対外的な正統性を失っていた。そうすると、内部の正統性を強めなければ国を統治していけなくなる。そこで蒋介石の後継者、息子の蔣経国は戒厳令を解除して野党の存在を認め、選挙を実施することで国内的な正統性を強化した。

また韓国、フィリピン、さらにはゴルバチョフのソ連もそうだったのだが、かつて独裁体制を敷いていた国が民主化した事例に共通する点がある。それは、国の支配層の間において、無理に独裁権力を維持するよりも、民主化したほうが自分たちにも得になるのではないかと判断する瞬間が来たということだ。

韓国では盧泰愚將軍が民主化宣言を行い、フィリピンではラモス参謀総長とエンリレ国防相がマルコス政権を見限ってピープル・パワーの側に寝返ったことが体制転換の決定打になった。



習近平

ソ連では、ゴルバチョフのペレストロイカやグラスノスチに対する党内上層部からの反対の声は弱く、最後にクーデター未遂事件が起きたが後の祭りだった。それと比べると、中国の場合、支配層はまだそこまでの認識に至っていないということになる。

おそらく中国でも将来のどこかの時点で、かつての趙紫陽のような先見の明のある指導者が現れて一党支配体制の実質的な変容、政治参加の拡大を唱え、それに反対して、独裁堅持を唱える人々と1989年のような闘いを起こす可能性がある。だが、今はまだそうした事態の展開は見えてこない。

習近平は、年に何回も外国を訪れてい

ろいろな国を見ている。ほとんどの国では指導者は選挙で選ばれて、任期が決まっており、その地位にいつまでもいるわけにはいかない。その反面、自分の地位について習近平が日常、感じているような不安や緊張があるわけではない。そこで習近平がなにか感じないはずはないと思うが、やはり中国は中国で、中国式にやるほかはないと思っているのだろう。

グローバリズムと中国

世界と中国という問題だが、昨年のアメリカの大統領選挙や英国のEU離脱、国民投票がその典型であったけれども、反グローバリズム、自国中心主義がこのところ世界的に目立つようになった。周知のように、移民問題と並び、その主な標的の一つは自由貿易である。

中国は自由とか人権とか、いわゆる西側世界の普遍的価値とされるものに対しては中国の国情に合わないとして受け付けない。それなのに、こと自由貿易体制となると、今年1月のダボス会議や7月のG20といった場ではその守り手のごとくに振舞っている。現行体制を擁

護する守旧派といった役回りで、これまでの中国のイメージにそぐわないといった印象を与えているのではないだろうか。

しかし、これもまた私には、いかにも中国らしいと感じられる。つまり、今、自分の利益になるものを守ることはなんのためらいもない。個人の自由とか民主的権利には冷たくして、自由貿易はいいというのはおかしくないだろうか、といったことはまず考えない。

かつて毛沢東は「アメリカ帝国主義は全世界人類の共同の敵」と言いながら、突如、ニクソン大統領を北京に迎えた。また「ソ連修正主義とは1万年でも論争する」と毛沢東は言っていたのに、その決着をつけないまま鄧小平はソ連との関係を改善した。前言にとらわれずに君子豹変できる自由こそ、皇帝型権力の利点であると言えるのかもしれない。

中国共産党は、アメリカは没落しつつある大国で、中国は台頭しつつある大国だという言説を広めようとしているふうに見える。何をするにもアメリカとの関係を意識しているので、トランプ政権が自由貿易に反対したり、地球温暖化を防ぐためのパリ協定から脱落したりし



ユーチューブに投稿された入院先のベッドに横たわる劉氏と医師らの映像＝共同

て世界に背を向けている今こそ、自分たちがアメリカの地位にチャレンジするいい機会だと思っているのではないか。シーソーのように、アメリカが下がればこちらが上になると。

中国のこういう姿勢は世界に戸惑いを与えている。自由貿易の旗手、温暖化の防波堤を演ずる中国と、南シナ海紛

争についての国際仲裁法廷の判断を「紙くず」とのしる中国との分裂だ。最近の例では、7月のドイツでのG20の折しも、2010年に獄中でノーベル平和賞を受賞した中国の反体制知識人、劉曉波氏が末期の肝臓がんで死期が近づいてからようやく瀋陽市内の病院に移されたが、外国で治療を、という本人と家族の願いも聞き入れられず、ほどなく亡くなった。

世界中の多くの人たちが、彼の61歳という若さでの死を惜しんだが、当時の報道によれば、ドイツで習近平と接触した諸外国の首脳は誰も劉曉波の死に触れなかった。経済大国、自由貿易の守り手である中国の代表と人権抑圧国の代表という習近平の2つの顔のうち、結局、前者に敬意を表した形となった。

これには各国の多くのメディアが批判を加えたが、われわれは中国のカネの力の強さを見せつけられた。

ただ、欧州や米国におけるような、グローバルゼーション・デバイドというか、グローバル化の恩恵を被るものと、被害者意識を有する者とのギャップは中国国内にも存在する。それを習近平も意識しているからこそ、支配層が求める

自由貿易の旗を振る一方で貧困対策にも力を入れているのだろう。

方向性の喪失

確かに中国の目指すものが究極のところ何なのか、外から見ているとなかなか分からない。しかし、それは国外の見方だけではなくて、実は国内にもそういう戸惑いがあると思う。発展の方向性が見失われているのだ。習近平は、経済では市場に大きな役割を発揮させる、改革を進めると言いながら、政治的には統制をますます厳しくしている。いったい中国は右に行くのか、左に行くのか分からない、というのが、多くのインテリたち、幹部たちの感覚ではないだろうか。

ところが、今の中国の支配層にとってはこのやり方が一番都合がいい。経済的には規制を緩和し、どんどん企業活動を活性化させて儲けさせてほしい。政治的には政権の基盤だとして国有企業の寡占体制を守り、また一党支配へのチャレンジにつながりかねない自由な活動を許容するつもりはない。短期的にはこのような政策が続くのだろう。

しかし、習近平が中国を長期的には

どっちへ率いて行こうとしているのか、それがさっぱりつかめない。

外国では「中国崩壊説」も根強い。2、3年前にアメリカのデービッド・シャンボー教授が崩壊説（注1）を唱えて話題になったが、大方の見方は少なくとも当面何年かはこのままいく、ということだろうと思う。その判断はやはり、ここしばらくは経済が大きくつまづくことはないだろうという見通しに基づいている。

そうは言っても、中国とて中長期的にはいづれ経済成長率がさらに下がり、社会矛盾が嵩じ、政治的争いが激しくなり、最終的には社会体制が変わるというのが、一般的な予測ではないだろうか。

欧米においても、経済の停滞に加え、旧ソ連や中東におけるカラー革命の結果が芳しくないこともあり、数年前からデモクラシーに対する失望が高まっている。中国に限らず、人類全体がどこに向かっているのかという疑問さえ出てきた。そこで、一部の調子にのった学者たちは、中国の道こそ進むべき方向ではないかと言い出している。前に述べたように、デモクラシーはイギリスのEU離脱を決めたり、トランプをアメリカの大

統領に選んだりもした。一見すると、旗色は悪いように見える。

けれども、欧米においてデモクラシーをやめて王制に戻ろうとか、大統領は強いワンマンでいいとか、そういった制度変更を唱える者はほとんどいない。

デモクラシーには2つの側面というか、原理がある。1つは1人1票制にもとづく意思決定の機構原理であり、もう1つは人権、自由、平等といった価値原理だ。そして今起きている批判は機構原理に対するもので、デモクラシーの価値原理に対する批判ではない。

そこにデモクラシーの根強さがある。強権制は意思決定が速いとか、資源を集中させられるとか、強みもあって発展には有利かもしれない。高成長期に急速な開発を進める独裁制を開発独裁と呼ぶ。

しかし、チェック・アンド・バランスを欠いた権力は必ず濫用される。権力は腐敗する、絶対的な権力は絶対的に腐敗するという格言は正しい。習近平の鉄槌をもってしても、かつての中国の王朝と同様、腐敗はなくならないだろう。法の支配を求める人々の欲求が、体制の変化を強く促す日がいずれ来るであろう。歴史にジグザグは付き物だろうが、長期的

にみて、人類の歴史は権力の濫用を防ぐ方向、法治が実現する方向を向いていると私は思っている。

（注1：1953年）、ジョージワシントン大学教授。『終焉に向かい始めた中国共産党』（2015年）

習近平にとっての権威

話を中国に戻して、習近平という人間にとって権威とは何なのか、ということを考えてみたい。

前述の劉曉波にしても、なぜ死期が迫るまで獄につないでおかなければならなかったのか。かつて鄧小平や江沢民は、劉曉波よりもっと過激な反対派だった天文学者の方励志、壁新聞であからさまに鄧小平を批判した魏京生を、いずれもアメリカに出国させることを許した。当時の状況の下では、国内に残すよりは国外追放した方が面倒が少ないという判断があったのかもしれない。それにしても、習近平には瀕死の病人の願いを聞いてやるほどの余裕もないのか。

他方では笑い話として伝えられたが、風貌が似ているということで、習近平を漫画のくまのプーさんに擬するようなネット上の書き込みを、当局がせっせ



7月17日付英紙フィナンシャル・タイムズの1面。習近平国家主席がオバマ前米大統領と並んで歩く写真とプーさんとティガーが歩く姿を並べて紹介している。(毎日新聞7月18日夕刊)

と消去していると言われる。くまのプーさんは人に嫌われるキャラクターではない。というより、むしろ一般には好感をもたれているから、西側の政治家ならむしろ喜ぶところだろう。それでも許さないというのは、われわれにはむしろ滑稽にさえ思える。

その理由をあえて推測すれば、習近平は自分を毛沢東のごとく神格化しようとしているのではないか。みんなに親しまれるより、畏れられる人間でありたい。それに差し障りのある人間、ものごととはすべて徹底的に排除すると腹をく

くっているのではないか。

そのことは、2012年の第18回共産党大会から5年間、党の総書記を務めて2期目に入る今秋の第19回党大会とその後展望を彼がどう描いているか、という問題にかかわっている。

今秋の党大会以降、習近平の総書記任期は2期目に入る。そこでは、5年後の次の総書記候補、つまり次の最高指導者の候補を、それと分かる形で党のトップグループ、政治局常務委員会のメンバーに抜擢するのがこのところの何回かの党大会での通例だ。

しかし、最近の動きを見ると、習近平には次の5年を終えたら、つまり2022年の第20回党大会において、総書記を辞めて引退する気はさらさらなく、その後も最高指導者の地位に留まろうとしている気配が濃厚だ。たとえば前述のとおり「習近平思想」(注2)という用語が最近使われ始めた。中国共産党では過去の最高指導者の考え方や主要な政策に名前を付けて、党の行動の指針、いわば正統イデオロギーとして党規約に書き込んできた。マルクス・レーニン主義、毛沢東思想、鄧小平理論までは個人名が付いていたが、その後の江沢

民と胡錦濤については「三つの代表」重要思想、科学的発展観というように個人名を冠していない。また、マルクス、レーニンや毛沢東の「主義」や「思想」と比べると、鄧小平の「理論」は「イデオロギー」として一段レベルが低い。つまり、ここで習近平「思想」が新しい正統イデオロギーとして公認されれば、習近平は鄧小平を超えて毛沢東と並ぶ存在になるわけだ。

(注2:「習近平思想」とは現在のところ、彼の「五位一体」――経済建設、政治建設、文化建設、社会建設、生態文明建設と、「四個全面」――全面的に小康社会を建設し、全面的に改革を深め、全面的に法による統治を進め、全面的に厳しく党を治める、を主要内容とする模様である)

第19回党大会へむけて

これまでの慣例では、党大会では68歳以上の人間は中央委員に再選されず、したがって政治局委員にもならない。それにしたがえば、現在7人いる政治局常務委員の内、習近平と李克強首相の2人だけが残り、あとの5人は退任することになる。そのあとに新しい委員が入り、前



胡春華

述べたように、その中には5年後の総書記候補がいるというのが最近のパターンだった。ところが、習近平が権威と権力を独占しようとしている状況を見ると、江沢民―胡錦濤―習近平と続いた権力継承方式が再現されるとは限らなくなってきた。

5年前に行われた人事配置からすれば、今回の新任の5人の常務委員には、おそらく現政治局委員（常務委員を含めて25人）の中で飛び抜けて若い胡春華（広東省のトップ＝党書記・54歳）と孫政才（重慶市のトップ・53歳）の2人が総書記候補として名を連ねるだろうと見られてきた。

ところが、7月半ばにそのうちの1人、孫政才が重慶市のトップを解任され、7月25日に「重大な規律違反の疑いで、中央規律検査委員会の調査を受けて

いる」と発表があった。失脚したことは間違いない。

こうなると残る1人の候補者、胡春華の立場も有利になるどころか、果たして候補者に残れるかどうかさえ怪しくなってきた。もし胡春華も消えるようなことになる、従来型の後継候補はいなくなってしまう。習近平のあとに続く者がいない、というのは、習にとってベストの状況であろう。

もっとも孫政才にはこれといった大物の後ろ盾がないと言われるのに対して、胡春華には胡錦濤前総書記というはっきりした守護神がいる。江沢民と異なり、すべての地位を譲ってくれた胡錦濤には習近平もそれなりの恩義は感じているはずであって、さすがの習近平も胡春華には簡単には手は出せないという見方もある。

習近平思想の登場は、外部から中国の政治を見ているものには、すぐさまこのくらいのところまで想像をたくましくさせる。だが、私の知る中国人の中には、習近平思想と謳いたいなら、そうさせられる人はいないか、と突き放して見ている人もいる。またそんなことをしたらからといって、ものごとがうまくいくとは限

らないと心配する人もいる。

つまり習近平は毛沢東ほど有能なのか、独裁的な権限を1人の人物が握ったとしてうまく統治できるのか、毛沢東だって大きな失敗をしているではないか、というわけだ。

だが、習近平にすれば、習近平思想を謳いあげること満足するとは思えない、さらに党主席制の復活を狙っているという見方には説得力がある。去年秋の党6中全会で中央指導部の「核心」の地位を得て、党員に忠誠を誓わせた。しかし、総書記に留まる限り、制度上の権限は弱い。集団指導体制を取り消し、党主席という別格のポストについて、実質的な最高指導者としての任期延長を狙う可能性は大いにある。政治局常務委員会でさえ廃止してしまうかもしれない。そうなればまさに皇帝型権力者の復活である。

しかし、それに対しては、さすがにそこまでやりすぎではないか、という声が高まることが予想される。反習近平の動きが顕在化する事態も考えられる。あるいは、亡命する指導者が出てくる可能性もゼロではない。

最近の習近平の幹部人事を見ている



孫政才

と、すでにそうした事態に備えていると
もとれる。順不同だが北京市のトップに
抜擢された蔡奇、天津市トップの李鴻
忠、黒竜江省トップの張慶偉、湖南省
トップの杜家毫、雲南省トップの陳豪、
江蘇省トップの李強、遼寧省トップの李
希、そして貴州省トップから重慶市の孫
政才の後任にいた陳敏爾の各氏のう
ち、蔡奇、李強、陳敏爾の3人は浙江省
時代の、杜家毫と陳豪は上海市時代の習
近平に直接仕えた部下だし、張慶偉、李



陳敏爾

鴻忠、李希の3人は公の場で習に忠誠を
誓ったことで有名である。

中でも陳敏爾は56歳と年齢も胡春華、
孫政才らに近く、新世代の最有力株だとい
まは見られている。最大の都市、上海
の市長も習の浙江省時代の部下の応勇
だが、この人も近く、市長の上のトップ
(市党委書記)に昇格するだろうともっ
ぱらの噂である。

「五湖四海」から広く人材を集めると
いう人事の王道に背を向けた形だが、も
ともと習には党内に分厚い支持基盤が
あったわけではないので、信頼できる人
間で回りを固めるほかはない。自然と草
木がなびくように広く支持を集めるこ
とはできないし、反対勢力を数で圧倒す
ることもできない。したがって、これま
でもそうであったように、時々、「虎」(大
物)を叩いて、反対派を震え上がらせる

以外にはないだろう。

こう見てくると、今は確かに表面的に
は習近平の権力は強い。しかし、いくら
中国の伝統とはいえ、皇帝型統治を旨指
すのは時代の力という大きな風圧を受
けねばならないし、反対派との闘いを避
けることは不可能である。これから習に
とっての正念場、秋の中国共産党第19回
全国代表大会に向かって、あの国から何
が聞こえてくるか、耳をすまして待つこ
とにしよう。

筆者略歴(たかはら あきお)

1981年東京大学法学部卒、英国
サセックス大学にて博士号取得。立
教大学教授等を経て2005年より
東京大学大学院法学政治学研究科教
授。専門は現代中国の政治、外交。東
京財団上席研究員、日本国際問題研
究所上席客員研究員、日本国際フォー
ラム上席研究員などを兼任。近著に
『シリーズ中国近現代史⑤ 開発主義
の時代へ1972―2014』(共著、
岩波新書)、『東大塾 社会人のため
の現代中国講義』(共編、東京大学出
版会)。

武漢取材ノート

変化という浪に押される内陸経済

共同通信社 経済部 竹内健二



中国の景気をけん引してきた沿岸部の成長が鈍化する中、ホンダやローソンといった一部の日系企業が内陸市場の中心である湖北省武漢市の開拓を急いでいる。この6月、その武漢を訪れる機会に恵まれた。これまで北京や上海、陝西省西安、四川省成都など中国各地に滞在なしに旅したことはあるが、武漢は初めてだ。ホンダが自動車業界担当の新聞や通信社、雑誌向けに主催した「中国現場視察会」なるメディアツアーに参加し、およそ1週間かけて上海、広東省広州及び隣接する深圳、そして武漢と、ホンダの四輪車工場や販売店を巡った。

なにしろスケジュールびっしりの取材旅行。おまけに武漢では終日、雨に悩まされ（大気汚染はいうまでもない）、「晴川歴々たり漢陽の樹」とか「溶溶漾漾、

白鷗飛び」といった詩的な風情とは縁がなかったが、昨今の中国経済や世相を反映するいくつかの現場を観察できたことは大きな収穫だった。大所高所からの観点——中国経済の構造的危機や政治リスクといった——には触れない。それらは常に多くの論者が語っていることであるし、往々にして（ご当人らの意図に反し）現場感覚を欠いているからだ。

「へそ」の成長

武漢は武昌、漢陽、漢口のいわゆる「武漢三鎮」が、長江とその支流である漢水（漢江）を囲むように構成されている都市で、武昌の歴史は三国時代にまでさかのぼる。李白の「故人西のかた黄鶴楼を辞し、煙花三月揚州に下る……」の舞台といえ、日本人にも親しみがわく土地だ

ろう（残念ながら、黄鶴楼を見学する時間はない）。近代では辛亥革命の発火点となり（武昌起義）、漢口は日本や西欧列強が租界を置いたことでも知られる。「湖北」——洞庭湖の北——という名称が示す通り、中国有数の湖沼地帯だ。

空港方面から武漢市街地を眺めると、湖から高層ビルが生えているかのような光景が楽しめる。河川に加え、道路網と鉄道網が交わって周辺都市へのアクセスが良く、武漢天河国際空港も有する交通の要衝で、いわば「中国のへそ」（現地の市場関係者）だ。

人口は1千万人を超え、内陸経済の大中心地といえる。日系企業も約150社が進出している。ただ、現代における発展の度合いは、沿岸部の上海や広州と比べると見劣りする感はない。上海、

広州は貧富の差こそ激しいが、既に成熟

した都市であり、消費にしろ、移動にしろ、快適な生活が営めるといえる（広州や深圳がやたらと暑い点はこのぞく）。時期が関係しているかもしれないが、滞在中は目立った空気の汚れも感じられなかった。広州市内では、以前から自転車に強力なバッテリーを積んだバイクもどき（スピードが出るくせに静かでとても電動自転車とはいえない危険なしろもの）だけでなく、二輪車全体の運転が禁止されている。深圳では電動バスの導入に力を入れており、全体として交通や環境事情の改善が進んでいる。上海では、かつて空港に降り立てばすぐに鼻を刺激した、何ともいえない湿っぽい空気の匂いを感じられず、一抹の寂しさを覚えた。

これに対して、武漢の印象はさながら「十数年前の上海」だ。市内のあちこちでビルや地下鉄の建設ラッシュが見られ、活気にあふれているが、ほこりっぽく、垢抜けなさを残した、良くも悪くも「開発中」の街。これは何も筆者の独断と偏見ではなく、武漢大の出身でSMB C日興証券の中国担当シニアエコノミストである肖敏捷氏によると「沿岸部からだいたい10年ぐらいの遅れで、いま成長

のエンジンがかかっている」。

武漢より北に位置する河南省鄭州市と並び「輸出も内需向けも好調で、ややバブル気味」（同氏）という。

もちろん、中心部は高層ビルが立ち並び、その景観は十分に近代的だ。今日ではスマートフォン普及に伴い、インターネット通販や、現金を持ち歩かないキャッシュレス化、スマホを使ったタクシー配車、スマホで予約できるレンタル自転車、後述する「外売」と呼ばれるデリバリーサービスなど、沿岸部発の生活スタイルがリアルタイムで共有される時代だ。かつての北京や上海より、よほど急激な変化の波に洗われているのではないだろうか。

中華味

今回、ホンダがメディアツアーを組んだのは（当然のことだが）中国市場での好調ぶりをアピールする狙いがある。2016年の新車販売台数は過去最高の約125万台を記録し、日産自動車やトヨタ自動車を抑えて日系ではトップに立った（全体では4位）。17年は130万台を突破する見通しで、そのけん引役となっているのが、現地好みに

デザインをアレンジした車だ。例えば、セダン「シビック」の中国投入モデルは16年にフルモデルチェンジした際、現地消費者の声を参考に「きびきびとした走り」や「大きく見える外観」（営業担当者）を取り入れた結果、販売が急速に伸びたという。「走り」の方は、追い越しなどが激しい過酷な中国のドライブ事情に対応するためらしいが……。

また、ユニークなのが「兄弟車」という商品戦略だ。中国で外資の自動車メーカーが車を生産する場合、現地企業との合弁でなければならず、外資の出資比率は50%まで、合弁は外資1社につき2社までとの規制がある。ホンダであれば、广汽汽車集団と「广汽本田汽車」（広州）を、東風汽車集団と「東風本田汽車」（武漢）の2社を運営している。この2社でそれぞれ、プラットフォーム（車台）など基本設計や性能は同じで、デザインが異なるモデルを兄弟車と位置づけて展開している。

例えば、中国人が大好きで、猫も杓子もといった観があるスポーツタイプ多目的車（SUV）では、广汽本田が「アヴェアンシア」を、東風本田はその兄弟車として「UR-V」を生産して好評を博して



アヴァンシア（左手前）とUR-V（右側）

いる。前者は都会の「洗練」や「成熟」がキーワードで、後者は「力強さ」や「インパクト」を強調し、若者に受ける「とがった」外観を追求したという。年代や地域によって異なる消費者の嗜好に合わせて製品を開発するのは手間のかかる作業だが、この場合は基本設計が変わらないので、開発コストを押さえることができる。

广汽本田の研究拠点でこの両車を試乗したが、外観といい、内装といい、走りといい、日本市場に持ってきても売れるだろうと感じさせる仕上がりだった。開発担当者によれば、中国市場向けとはいえ目指すのはあくまで「グローバル」に受け入れられるかどうかの水準であり、それは「中国では欧米より質の劣るモデルを売っているのではないか」という消費者の疑念を払拭するためだという。つまりは消費者の目が肥えてきたということだろう。

以前は、キンキラのカラーで「有頭有尾」（首尾一貫の意味だが、車の場合はフロントからリアまで派手に目立つ外観というニュアンスがある）のモデルが好まれたが、いまは洗練された、静かさを感じさせるデザインが主流になったという。中国人の若手デザイナーも育っているようだ。ツアーに同行した米国出身の記者が開発担当者に、いまは日本や米国の消費者だけでなくChina Taste——「中華味」を意識しなくてはならないのかと質問して一同の笑いを誘った。

こうした事情から、今回見学した広州、武漢の工場ともほぼフル稼働で生産を続けていた。いずれの工場も生産設備は最

新鋭で、さらなる自動化と効率化（省人化）を図っているという。ただ、伸びしろのあるのはやはり武漢工場で、東風本田の16年の販売実績は前年比1.5倍の約60万台に上った。「内陸部をどう攻めるかが鍵」（ホンダ現地幹部）であり、今後の需要拡大に対応するため、市内で第3工場の建設を進めている。筆者らが訪れた時は、小雨がけぶる広大な予定地でくい打ちが始まっていた。

せめぎ合い

販売の現場にも触れておこう。广汽本田は販売店のリニューアルにも取り組んでいるということ、刷新したばかりという広州市内の販売店を訪問した。営業からメンテナンス、修理、保険の販売までフルサービスを手掛けることが売りの店舗で、業績を急速に伸ばしているという。白を基調とした店内は洗練されていて清潔感があり、スタッフの姿勢もサービス精神にあふれていた。修理にいたつては、客は2階の待合室で飲み物を片手にくつろぎながら、自分の車の作業が後どれぐらいで終わるかをモニター画面でチェックできる仕組みになっていた。いたれりつくせりのサービスぶりだが、取

材ツアーの一行が到着した際、店長の号令の下、十数人のスタッフが拍手で（熱烈歓迎！）出迎えてくれたのには辟易した（すまない）。集合写真も他の客には迷惑になっただろう（重ねてすまない）。

これに対し、武漢で我々が訪れたのは「汽車城」だ。汽車＝自動車、城＝都市、として、なんとも訳しがたい単語だが「Motor city」と字義通り捉えてしまうと、米デトロイトのような自動車産業で成り立つ街、になってしまふ一要するに、さまざまなブランドの小型販売店が寄せ集まった車の「アメ横」のようなところだ。いちおう新車を売っているの

で、中古車センターとも違う。見たことがない（そのくせ妙に何かに似ている）エンブレムの「民族系」と呼ばれる地場メーカーの店舗が立ち並ぶ中に、ホンダやスバル、ドイツのフォルクスワーゲン（VW）といった有名ブランドの車も展示されている。ここでも、ほとんどの展示車がSUUVだ。もちろん、正規のディーラーではない。なんでも、不透明なルートで入手した車両をこういったところに持ち込み、非正規の装備品を付けることで格安でそれらしい代物に仕上げるようなグレーゾーンのビジネスだといひ、一定の

需要があるようだ。

当然、先述したような販売店とは対立する存在。ホンダとしては、正規装備品の品質やアフターサービスの良さを消費者に訴えることで「良貨が悪貨を駆逐する」ことを狙うしかなく、せめぎ合いになっているようだ。汽車城はおそらく全国各地にあり、何も武漢だけに限ったものではないが（逆に武漢にも広汽本田や東風本田の販売店はある）、正規店とのコントラストは鮮明だった。

なお、時系列が前後するが、深圳では「深港澳国際車展」（深圳・香港・マカオ国際モーターショー）も見学した。

これは最大規模の北京、上海の両モーターショーが「A級」とされるのに対し、「B級」格付けの地方イベントで、その特徴は一般来場者が商談、つまりその場で車が買えるという点だ。広汽本田のブースの2階にも商談スペースが設けられ、子連れの若い夫婦が「アウディより修理が少なくてすむ」という理由で「フィット」の売買契約を結んでいた。

現地嗜好

現地の消費嗜好を積極的に取り入れているのはホンダだけではない。コンビニ

大手のローソンは昨年5月、武漢市内に3店舗をオープンした。中国の中部地域に進出したのは日系コンビニとして初めてだ。当初は3年で湖北省全体に200店の計画だったが、今年5月末に武漢市内だけで100店舗に達した。

飛躍の秘訣は、中国の国有企業で中西部に多くの小売りチェーンを持つ「中百控股集团」傘下の「中百超市」とエリアライセンス契約を結び、同社のコンビニをローソンとしてリニューアルしたことにある。「中百羅森（ローソン）便利店」が誕生したわけだが、単なる看板の書き換えではなく、店舗運営のノウハウはローソンが提供し、顧客基盤や出店計画、マーケティングなどは中百の経営資源を活用するやり方だ。さらに、現地向け商品開発を任せたことで、「日式（日本スタイル）豆乳ケーキ」（12.5元）といったオリジナルのヒット商品も生まれた。

実際にホテル近くの店舗をのぞいてみると、日本の店舗と同様のつくりで店内は明るく、上海の地場のコンビニなどより利用しやすい。写真を撮っていると、アイスクリームを手にした若い（と思われる）女性が「私は毎日ローソンを利用してるわよ！」とPRしてくれたの

が幕間狂言となった。

ローソンといえば、中国への進出は1990年代後半と早く、上海に留学中だった筆者も淮海路の店を利用した記憶があるが、当時は微妙な味のおにぎりや惣菜を置いている、物珍しさだけが取りえの存在だったと思う。地元企業に経営を任したためにうまくいかなかったそう、その後、後発組のセブン・イレブンやファミリーマートに店舗数で大きく水をあけられた（ファミマの場合は台湾系の中国食品大手である頂新グループと提携したことが奏功した）。直営店方式に



武漢市内のローソン

切り替えて上海や北京、重慶などで展開し、上海などではそれなりの地位を築いたようだが、全体の店舗数は認知度の低さが災いして伸び悩んでいるようだ。

ここに来て方針を切り替え、新たに中百と提携したのは（中百に）やる気がある」（ローソン担当者）からだとい、この十数年で中国の小売りチェーンの経営姿勢も大きく変わったということだろう。ローソンは湖北省を拠点に、中部地域の他省への進出も狙っている。

小売業界では、イオンも14年から武漢に大型ショッピングモール「イオンモール」を出店している。こちらも内陸部への進出は初だ。東風本田の第2工場の向かいには、2店目で規模はアジア最大級という「武漢経開店」（経済開発区を縮めた言い方のようだ）があり、平日の午前中から賑わいをみせていた。客の多くは送迎バスを利用しているようだ。

気になったのは、昼時になっても1階の日本食店フロアにある「吉野屋」やカレーの「COCO壱番屋」は閑古鳥が鳴いていたのに対し、2階の四川料理やご当地料理の店にはそれなりに客が入っていたことだ。店頭の呼び込みも中国系の方が熱心だった。「日式」が客寄せの看

板になったとしても、こと食に関しては実際に利益が上がるかどうかは別問題のようだ（単に日本食店が高いだけかもしれない）。

電動化

このように内陸部の旺盛な消費意欲を取り込んで好調に見える日系企業だが、課題は「次の主力商品をどうするか」（前出の肖敏捷氏）という点だ。短期的には、小型車への減税措置が縮小されたため、17年の新車販売は弱含みとなる可能性が高い。自動車の販売店も沿岸部では飽和状態に達しつつあるようだ。

さらに、中国市場をけん引するSUVには致命的といってもいい弱点がひそんでいる。武漢は確かに上海、広州と比べて空気が悪く、バスで移動していても喉がいがらっぽくなる。東風本田工場を見学した当日は朝から雨が続き、近くのビルも霞んで見えたが、その原因の一半は雨でも消せないスモッグにあるらしいかった。そんな中を多くの車が行き交い、各所で渋滞が起きていた。

この悪名高い大気汚染対策のため、中国政府はメーカーに法規制をかけてでも電気自動車（EV）やプラグインハイブ

リッド（PHV）など「新エネルギー車」（New Energy Vehicle＝NEV）の普及を目指す構えで、燃費も割高なSUV人気がいつまでも続く保証はない。もっとも深圳には比亞迪汽車（BYD）という地場のEVメーカーがあり、積極的にSUVを生産しているが、普及価格帯で電動SUVを出すにはまだバッテリーの値段や重さなどからハードルは高い。

この法規制というのは、18年にも施行するとみられる「NEV法」で、年産5万台以上の自動車メーカーに一定の割合でEVなどの生産を義務づけ、達成できなければ罰金などのペナルティーを科すものだ。「ガソリン車だけの生産拡大は認められない」（広汽本田幹部）時代が到来し、数万台規模での環境対応車の生産が必須となる。ただ、日本メーカーにとって深刻なことに、NEV法には日本が得意とするハイブリッド車（HV）は含まれていない（燃料電池車は対象だが、中国では水素スタンドのインフラ整備は進んでいない）。また、EVの方により重点が置かれ、PHVだけではノルマを達成できない見通しとなっている。

このため、ホンダは18年中に中国でEVの新型車を発売すると表明しており

（生産は広汽、東風の双方で行う）、HV、PHV技術にこだわってEV路線には消極的だったトヨタも開発に乗り出している。日系三大メーカーのうち、日産は既にEV技術を確立しているが、中国で消費者に受け入れられる価格でEVを販売できるかは別問題となるだろう。

もちろん、こうした認識や危機感には欧米メーカーにも共有されている。先日、スウェーデンのボルボ・カーが19年以降に発売する全車種を電動化モデルにし、純粋ガソリン車は縮小していく方針を打ち出したが、中国の新規制も踏まえた対応だろう。ボルボの親会社は、中国の自動車大手である浙江吉利控股集团だ。中国政府もいたずらに規制をかけるだけでなく、EVの生産に限っては外資メーカーを優遇する施策も打ち出している。

前述した「外資1社につき合併は2社まで」という規制を撤廃すると「外国投資産業指導目録（2017年改訂版）」に盛り込み、7月28日から実施する（自動車生産全体に関わる外資規制緩和の動きもあるが、まだしばらくかかりそうだ）。ただ、もう一つ問題となるのは、EVというのは極論すればモーターがあつて、タイヤが付いていれば走るわけで、

ガソリンエンジンを中核とする（とくに日本で強固な）伝統的なサプライチェーン（調達・供給網）に依存しなくてもよくなる。米グーグルにみられるように、異業種の参入障壁がどんどん下がっている分野だ。外資メーカーは、ライバルや急成長する民族系メーカーだけでなく、IT系などメーカー以外の新規参入者との競争にさらされる可能性が高い。

NEV法については実施時期や詳細がいまだ流動的だが、秋の中国共産党大会が終了すれば一気に具体化することも考えられる。

今回のツアーでは最初に上海を訪れたが、浦東地区の一角でよく整備されているのに車が1台も止まっていない充電スタンド付きの駐車場を見かけた。入り口が封鎖されていたので、一体何のための施設か首をかしげたが、おそらく今後のEVの普及を見越し、地元当局がとりあえずハコだけつくってみたのだらうというのが現地関係者の意見だった。とにかく変化の早い中国で今後、（政治主導で）雪崩を打ったようにEV化が進めば、これまで中国で稼いできた日米欧の先進自動車メーカーがそれほど遠くない将来にその優位性を失う恐れがある。



レンタル自転車の駐輪スタンド

また上海や広州では近年、衛星利用測位システム（GPS）を活用した乗り捨て可能なレンタル自転車が流行した。スマホのアプリを使って自転車がある場所の把握や予約もできる手軽さが人気を呼んでおり、街のあちこちで利用者を見かけた。駐輪スタンドは広場の前や大通りに面したスペースにオープンな形で設置されており、使い勝手がよさそうだ。浦東地区では、駐輪スタンドを見学している我々を見て、物珍しげに近寄ってきた

中年男性（中国の街中でよく見かける何をしているか分からないタイプ）が、しばらくすると管理スタッフとおぼしき人から熱心に利用の仕方を聞いていた（どうやら、その後で自転車を借りていったようだ）。

中国の都市部では車の保有規制も進んでおり、市民の間に「必ずしも自家用車でなくていい」という認識が広がれば、超小型EVのような新たな乗り物や、シェアサービスが取って代わるかもしれない。そして、今日ではそういった流れは、すぐに武漢などの内陸にも波及するだろう。ちなみに、中国の自転車シェアサービス最大手の「Mobike（モバイク）」はこの6月、福岡市に現地法人を設立して日本進出を果たしている。

波浪

スマホを使ったサービスといえば、タクシー配車の「滴滴出行」も躍進が著しい。米ウーバー・テクノロジーズの中国版とみられていたが、昨年にはウーバーの中国事業を買収してしまった。武漢では、中心部のホテルから長江大橋の近くの夜景がきれいだというスポットまでタクシーで往復してみた―雨が土砂降りに

なったためすぐに引き返すはめになったが―が、いまだタクシー乗り場から、あるいは手を挙げて流しのタクシーを止めるのは少数派か、観光客ぐらいなのかもしれない。帰りのタクシーでは、運転手のスマホにひっきりなしに顧客からの配車リクエストが入っていた。

さらに近年、若い世代を中心にはやっているのが「外売」と呼ばれる飲食の宅配サービスだ。ただの出前だと思われるかもしれないが、スマホから注文すると、配達員がいまどこにいて、あと何分で到着するかまでチェックできる仕組みになっている。味や配達サービスの良し悪しなどを評価でき、それが消費者間で共有される。実際に利用している中国人の知人によると、オンライン決済で現金を払う手間もいらず、たいへん便利なののだそうだ。ちなみに評価制度といえば、タクシー配車にも採用されているほか、天河国際空港の出国審査でも、審査官のサービス態度を5段階で評価するボタンが当人の目の前に設置してあったのは苦笑した。「ふつう」とか（冗談でも）「悪い」と押すのは決まりが悪いので「良い」を押した。

「外売」は、ひところは沿岸部の大都

市のサービスといわれていたが、いまや武漢にもすっかり浸透している。前述のイオンモールで筆者が入った地元料理の店では、料理の入ったビニール袋を両手にさげたスタッフがひっきりなしに出入りしていたが、近所のオフィスや個人宅に配達する「外売」だったのだろう。

こうした出前サービスが、従来型の実店舗にとって脅威となるのは想像に難くない。各店が同じサービスをしたとしても、それは客の「ついで買い」を奪ってしまうわけで、コンビニだろうとショッピングモールだろうと客足が遠のくのはマイナスだろう。故に単なる「モノ消費」ではなく、いわゆる「コト消費」（体験型）を盛り上げ、いかに実際の店舗に足を運んでもらうかが今後の売り上げを左右しそうだ。

他方で、「外売」を含めたネット通販も競争が激しく、近年は成長が鈍化している。そこで、電子商取引（EC）最大手アリババグループの馬雲（ジャック・マー）会長は昨年、ネット通販と一般小売りの双方の強みを融合する「新小売」という概念を提唱している。

簡単に言ってしまうと、将来的には実店舗だけでなく純粋なECも生き残れ

ず、ビッグデータや、あらゆる機器をネットですつなぐ「モノのインターネット」（IoT）を活用した複合的な流通サービスが台頭するだろうという主張だ。そこに金融や製造現場、エネルギーの新業態も加わることで、新たなビジネスモデルが出現する、アリババがそうした変化を仕掛けようとしている。中国語には「長江の後浪が前浪を推す」（後から来る人や事象が絶えず古いものに取って代わる）という俗語があるが、武漢に進出した日系企業も、常に後ろから――長江の流れとは逆に沿岸部から――打ち寄せてくる波浪に備え、変化に対応していかなければ勝ち続けることは難しいだろう。

さて、今回の旅の締めくくりだが、上海、広州と元氣だった取材ツアーご一行は、武漢のホテルを出発するころには、ほぼ全員が腹をこわしていた。客室内に置いてあったミネラルウォーターのくせに添加剤入りの湖北省産の水と、空気がよくなかったというのが衆目の一致するところで、こうした面でも早く上海や広州（大気汚染が改善しない北京は除く）に追いついてもらいたいと切に感じた。最後に余談だが、旅の途中で今年最大の人気テレビドラマとの呼び声が高い

「人民の名義」の原作である同名の小説を買って読んでみた。これは架空のH省京州市（ドラマでは漢東省）を舞台として、党と政府のいわゆる「反腐敗」を描いた政治ドラマだが、事件の焦点となるのが景勝地の湖の開発を巡る利権漁りということ、湖沼地帯である湖北（Hubei）省を連想させる。

また「H大学政法系」出身の主人公が、師弟関係や同期とのしがらみの中で葛藤するのが物語の肝で、これも名門の武漢大学がモデルではないかとネットメディアで指摘されている。もちろん（南京市がある江蘇省だ、いや広東省だ）諸説あるのだが、内陸部の武漢はこんなところからも注目を浴びている。

筆者略歴（たけうち けんじ）

1977年長野市生まれ。学習院大学在学中の98～99年に上海・復旦大学に留学。2003年東京大学大学院修士課程終了、共同通信社入社。大阪、奈良、金沢、名古屋の支社局を経て、11年から経済部。中国研究所『中国研究月報』編集委員。



出稼ぎの両親を訪ねて

深圳で環境衛生業務に従事する労働者が地元に残してきた子どもたち561名が、7月12日から14日の間、深圳に招待され、両親とともに、野生動物園や蓮花山公園、深圳湾の海浜などを案内されたほか、1人2千円の奨学金を支給された。これは深圳市都市管理局と美麗深圳公益基金会が今年上半年期連合して行っている環境衛生労働者に対する慰勞プロジェクトの1つで、今回は野生動物園も協力した。

深圳で環境衛生事業に携わる労働者の多くは地方の農村出身

である。深圳市の生活コストは高く、彼らの報酬は低いため、子どもを地元に残している。重慶出身の王さんは深圳市廃棄物処理センターの労働者。彼が子どもに会えるのは半年に1度。旧正月に帰れなければもっと長く子どもに会えない。今回のイベントは彼にとっても貴重な思い出。子どもたちは「また来たい」「父母を手伝いたい」と喜んだ。

都市管理局と基金会は他にも旧正月の慰問活動や愛心食事会、美しい深圳体感マラソンなどを実施している。また、労働者の事故や病気に対する緊急援助も行っている。今年上半年で11人に対して20万円の援助が行われた。一例として、仕事中に自動車事故で亡くなった51歳の張さんの家族は臓器提供に応じ6人の病气の人に生きる希望を与えたが、都市管理局は敬意と慰問の気持ちを込めて家族に10万円を送った。

〔『工人日報』2017年7月20日〕

子どもの海外体験が進化

夏休みに子どもを海外のサマーキャンプに入れるか、あるいは海外旅行に連れていくのはい部の家庭では当たり前のことになっている。

上海市奉賢区解放路小学校はシンガポールの尚育小学校との相互交流を取り決め、この夏初めて小学3年生と4年生20名からなる「遊学団」を派遣する。派遣日を7月21日にしたのはシンガポールの民族融和の日であるからだ。5日間、児童たちはシンガポールの学校で現地の児童と一緒に授業を受けるほか、放課後はチャイナタウンやリトルインドを訪れフィールドワークを行う。

滙賢中学からは2年生の20人がこの夏オーストラリア・ブリスベンの有名私立中学で14日間過ごす。現地の生徒と授業を受け、実験を行い、テーマ別討論、スポーツを行う。昨年参加した女子生徒は、中国の生徒が考えや感情を表に出さないと反対に

オーストラリアの生徒たちは熱情的で自由だったが、不思議と打ち解けた、と語る。

近年こうした学校間の交流で行われる夏休みの短期留学はますます増える傾向にある一方で、中には現地のサマーキャンプに直接入れようという人々もいる。アメリカ在住の張さんには夏になると友人からの問い合わせが相次ぐ。乗馬や水泳、サッカーなどスポーツ中心の一週間程度のものは2000から4000米ドル。人気急上昇のSTEMキャンプは数学や技術など科学系のキャンプで少し高い。どちらも半日の日程で親の送迎が必要だ。現地の私立学校が運営する運動も勉強もある全天候型キャンプは2週間で4500ドル。渡航費や同行する親の滞在費、キャンプ後の観光代が別にかかる。ではなぜ、わざわざ海外なのか。1つは生の英語に触れること、もう1つは文化の多様性を体感することを望んでいることだ。多くの親が将来の海外留学を見据えて、子どもの意欲や興味を

引き出し、留学前に充分な準備をさせようという考えのようだ。

『解放日報』2017年6月28日

学生ローンで15万元の謎

学生の林さん（仮名）が抱えた15万元の借金。この報道が出るや皆が感じた疑問はこうだ。一体なぜだ、何に使ったのか。本人に取材すると、借金を返すために借金を重ねただけで、使ったのは10%に満たないという。最初にネットで商売を始める資金に5千元、友達が携帯電話を買う資金として4千元借りたのだが、返済額が1万4千元になり、月々6百元の返済のために、また学生ローンから借りて膨れ上がった。

2015年10月から今までに、自分の名義で8件、友達の名義で4件を学生ローンから借り入れ、ほかにクレジットカードの借金がある。完済した1件以外今も抱える借金の利息は銀行の利息よりはるかに高い。

林さんは現在毎月3千元返済しなければならぬが、アルバ

イト収入は2千元ほどで、このままでは、借金は増える一方だ。

林さんによれば同じ宿舍の6人のうち5人までも学生ローンから借りているという。林さんが初めて借金したのも先輩の紹介だ。同じ大学で、ローン絡みで退学した者も多く、その中には学生ローンでバイクや自動車を買った者もいたという。

3つ目の疑問は返済能力のない学生になぜ貸すのかである。固定収入のある人にも審査なしでは銀行はクレジットカードも発行しないのに、学生ローンは学生に自動車を買うほどの金を貸すのだろうか。

林さんは借金返済のため、ある学生ローン業者の窓口業務を始めた。本部からの指示で、顧客のサインを取り付けたり、新規顧客を開拓したりしている。高い携帯電話をローンで買わせれば、5%の手数料が入る。

ローン業者は学生を助けると見せかけ、この方式で実は多くの世間知らずの学生をローンの泥沼に引き込んで多額の利益を

上げている。

最後の疑問は学生ローンを監督管理するのは誰かということだ。先頃、中国銀行業監督管理委員会、教育部、人力資源社会保障部は『学生ローン取締り強化に関する通知』を發布、インターネットのローン仲介業者に対する取締りを強化、違法な学生ローンの取締りに一定の成果をあげている。学生ローンのほかにも、就職ローン、研修ローン、起業ローンなど問題が噴出している地域もある。

林さんが利用している携帯電話用学生ローン・アプリをダウンロードしてみたが、7月1日より新規の貸し付けを休止していると表示されている。

（『西海都市報』2017年7月10日）

中国一深い地下鉄

重慶市軌道6号線の紅土駅は現在中国一深い駅で、最大深度は60メートル、32本のエスカレーターが設置されている。

しかし、実はまもなく開通する10号線の紅土駅はさらに深く、

地下94.467メートル、31階建てのビルの高さに相当するという。また、10号線の隣駅、鯉魚池駅の深度は76メートル、そして鯉魚池、紅土駅間の路線は深度84メートルと国内一深い路線となる。紅土駅は6号線と10号線の接続駅となり、完成後は91本のエスカレーターが稼働するほか、26階建てビルに相当する78.7メートルのエレベーターが運行する。

鯉魚池、紅土区間は重慶市の商業の中心地と住宅密集地の下を通り、何本もの幹線道路をくぐるため、全国でも例を見ない地下工事となった。作業通路は急勾配で、地上から作業現場は見えない。機材の運搬も人力で行った。鯉魚池駅と、紅土駅のトンネル断面は幅26・26メートル、高さ21・567メートルと、8階建てのビルが入るほどだ。掘削には特別な技術が使われた。

両駅の外枠工事は終わり、現在内部の工事が行われている。（『華龍ネット』2017年7月19日）

新刊紹介

矢吹 晋 著

『習近平の夢』（花伝社 2700円）

——台頭する中国と米中露三角関係

相変わらず精力的に執筆活動
を続ける著者の近作である。

一般に「習近平の夢」と
は、中国共産党結党百周年の
2021年に1人当たりGDP
を2010年の2倍に増や
し、中華人民共和国成立百周年
の2049年には中国を世界の
先進国の水準に到達させる、と
いうものであるが、著者はあえ
てそれを「海洋強国の建設であ
る」と、その姿を具体的に描く。

そして、2049年には「中
国海軍はアメリカ海軍に次ぐ勢
力になっている」（13頁）、一方
では「いわゆる『一带一路』構
想がひとまず実現し、中国の積
極的な働きかけのもとでユーラ
シア大陸の経済・政治上の再編
もかつてないほどに進み、東は

西太平洋沿岸から西はバルト海
や地中海に至る、ユーラシア大
陸を横断した新しい経済協力区
が形成され、中国はユーラシア
大陸の政治と経済の中心、そし
てユーラシア大陸と太平洋が出
会う場所として、ユーラシア内
陸部と海洋をつなぐ架け橋、さ
らに東洋と西洋を結ぶ要衝と
なっているであろう」（11頁）
というのが著者の予見である。

しかし、それに続く本書の主
要部分はその予見の検証ではな
くて、その予見をはるか前方に
掲げた上で、中国をとりまく目
前の課題の分析である。トラン
プ米大統領の登場、南シナ海に
おける紛争、経済、政治権力の
ありかた、朝鮮半島の核問題と
南北統一…。

これらをすべて取り上げる紙
幅はないので、ここでは著者
が力を入れている1、2の論点
を、私見を交えて紹介したい。

まず南シナ海紛争について。

著者はこう言う——中国の行為に
日本が反対したこと、逆に中
国、韓国から沖ノ鳥島が排他的
経済水域をもつという日本の主
張への反論（国連大陸棚限界
委員会への両国の「口上書」、
2012年）を招き、それが昨
年7月の国際仲裁裁判所の判決
に引用されたことで、中韓の沖
ノ鳥島に対する反論が肯定され
る形になった。

「つまり日本政府は、直接的
利害関係のない南シナ海の『岩
礁埋め立て』に干渉して、逆に、
中国側の沖ノ鳥島埋め立て反対
の意思を固めさせたのだ。実に
愚劣極まりない。これはほとん
ど『外交以前』の稚拙な愚行と
いうべきであり、利害得失をま
るで忘却した精神分裂的行動に
比するほかない」（80頁）。

この論断はさていかなもの

か。著者にはその前提として、
10年後の南シナ海の情勢を「パ
ランスは確実に中国の優位性に
傾く」（76頁）と見る判断があ
り、そこからわが国には「直接
的利害関係のない」南シナ海
のために沖ノ鳥島に不利をもたら
すような行動を「稚拙な愚行」
ときめつけているのであるが、
南シナ海における現在の中国の
拡張主義的行動に無言の承認を
与えていいものか、大いに疑問
がある。

そもそも水没寸前の沖ノ鳥島
を「島」と言いつのり、排他
的経済水域を認めさせよとわめ
いてコンクリートで固めた張本
人は当時の石原慎太郎東京都知
事である。多くの国民はうまく
いけばそれに越したことはない
といった程度の関心で、都知
事のパフォーマンスを見てい
ただけで、実のところは、「人
が常住すること」「独自の経済
活動が維持されること」といっ
た「島」の条件には及びもつか
ない小さな「岩」に何百カイリ



もの排他的経済水域が認められるとは、良識ある日本人は誰も思っていないのではないか。

それにしても、本書は南シナ海についての国際仲裁裁判所の501頁にも及ぶ判決の内容を詳細に分析し、紹介してくれている。これは本書の大きな特徴であり、著者の労を多としたい。

その判決は、いわゆる「九段線」に基づく南沙、西沙の島々に対する中国の主権的権利と管轄権の主張を「海洋法に違反するものであり、法的効力を持たない」とするフィリピンの主張を認めた。

これについて著者は、中国がもし「九段線」でなく、中

1952年に結ばれた「日華平和条約」第2条を領有の根拠として主張したとすれば、仲裁裁判所はどのように裁いたか(137頁)、というユニークな問題提起をしている。

どういうことか―「日華平和条約」は「サンフランシスコ平和条約」(以下「サ条約」)の翌年に日本と台湾の中華民国との間に結ばれた第二次大戦の講和条約である。そしてその第2条はサ条約の第2条に基づき、日本が「台湾及び澎湖諸島並びに新南群島(注・南沙群島)及び西沙群島に対するすべての権利、権原及び請求権を放棄したことが確認される」とある。

サ条約の第2条は日本が放棄する領土についての規定で、a 朝鮮半島、b 台湾及び澎湖諸島、c 千島と樺太南半部、d 委任統治領であった太平洋の島々、e 南極地域、と列挙し、f に「日本国は新南群島及び西沙群島に対するすべての権利、権原及び請求権を放棄する」と

ある。

台湾と澎湖諸島を中国に返還することは、戦後の対日政策を最初に決めた米・英・中国の首脳によるカイロ宣言の「満州、台湾及澎湖島ノ如キ日本国ガ中国人ヨリ盗取シタル一切ノ地域ヲ中華民國ニ返還スルコト」のくだりが、その後のポツダム宣言に引き継がれ、サ条約に結実し、さらに日華平和条約に引き継がれたものである。ただカイロ宣言の「中華民國に返還」という返還先が両条約にないのは、当時すでに中国大陆に中華人民共和国が生まれていたことによる。

著者の言うところは、日華平和条約の領土規定はもとと中華民国を暗黙裡に返還先と前提しているのであるから、これを中国が継承すれば日本が放棄した南沙、西沙群島は中国が返還先であると主張できるのではないかと、いうのである。

しかし、私見を言わせてもらえば、この説は成立しない。両

条約を比較すれば直ぐわかることだが、日華平和条約では「台湾、澎湖諸島と新南・西沙」が並べられているが、そのもとななるサ条約ではb項とf項に分かれていて。これは両者の性格が違うからである。台湾、澎湖諸島は「日本国が中国人より盗取したる」ものであるが、南沙諸島は本書81頁の図版説明にもあるように、1933年にフランス政府が領有を宣言したのに対して、1938年に近衛内閣が「無主地先占」を主張して日本領とし、当時すでに日本領であった台湾の高雄県に繰り入れたのである。中国から盗んだとは言えない。

したがって、日華平和条約を持ち出すことは「歴史的に中国領であった」という主張をむしろ弱めるという判断から、中国はこの点については口を噤んでいるのであろう。

ともかくさまざまな刺激的な一書である。

(田畑光永・会員)

旅行記

台湾紀行

阿部靖夫（会員）

ここ台湾台中市谷関温泉に滞在3日目、台北に移動する日になった。

連日の雨も上がって、朝からピーカン！初夏の日差しが窓から差し込んで眩しい。

昨日雨天の中、友人故藤井隆氏三回忌法要がつつがなく終り、日本から持ち込んだ線香の香りが指先に残る。龍谷大飯店駐車場では、台湾旅行客が大型バスに次々乗り込む姿に、なぜか余裕が感じられる。

ホテルロビーの表から駐車場に繋がる広場では、台湾桃を売るたくさんのダンボール箱がロビーの手前まで連なっている。5月下旬の今ごろが台湾桃のシーズンだったか！小粒な桃であるので、後で何処かで食べられるだろうとの思いからか、触



谷関温泉飲食店街

手を伸ばすにいたらず見過ごしてしまった。やはり食べてみれば良かったと後悔する。

ロビーから駐車場を通り前面は東西縦貫道である。その両側が谷関温泉の飲食店街になっている。「捎来歩道の先に、原住民との衝突で亡くなった日本人

士官の墓がある」と云う台湾電力誌の大甲溪発電所区域歴史調査資料の翻訳文の結び言葉が気になり、観光看板で確認しながら捎来道路を探す。

この谷関温泉は原住民タイヤル族の街である。台中市内から東へ約60km台中市和平区博愛里にある大甲溪谷に開かれた小さな街だ。海拔約750m、標高1000mを超えた山々に囲まれ、ここから先は3000m級に連なる中央山岳地帯。谷関温泉名物の吊橋を起点に東西縦貫道路が梨山を経由して花蓮まで延びている。

しかし、1999年9月21日の台湾中部大地震とそれに追いつちをかけた大型台風で、トンネルや道路がズタズタに寸断破壊されたため、18年が経過した今でも漸く片側通行ができるまでに回復したが、1日3回午前7時、12時、午後4時の制限下の通行でしかない。埔里経由の道路もあるが4〜5倍の労力を要する。



1905年と1913年、2回にわたる原住民同士、タイヤル族とセディック族（頭目モナ・ルーダオ）との戦で、逃げ延びたタイヤル族の祖先たちが開拓開発した場所が谷関温泉だ。1907年に温泉が発見されたことから「明治温泉」と呼ばれ、日本時代には警察の招待所が作られたため、静かな景観が今に至っているわけだ。現在も招待所は台湾警察の保養所として管理されている。



明治温泉のホテル

今回の旅行目的の二つ目がお墓探しだった。谷関吊橋の袂に拵来街道の字を確認し、微妙に揺れるつり橋を渡り墓を探したが、発見できず引き返す。地震の影響で崩れ落ちた斜面部分に途中から階段ができ、拵来街道が途中で変わってしまったようだ。

谷関温泉を離れる前にどうしてもお墓を探したい一心で、友人の車に同乗し谷関観光センターを訪問し、聞いてみることにした。「谷関大橋手前から遠目で石碑が見える」との話

で、橋の袂まで来て谷関大橋の手前から眺めるが樹木に覆われてそれらしき物は見えず。橋を渡り近くから覗き込むがどうにも発見に至らず。「石碑の前を通るときは必ず、おはようございます、と挨拶をして通ったものだ」と友人の年老いた母親から聞いた以上、絶対にあるはずだ！

観光センターに引き返し事情を話すと、職員らしき若い女性2人が案内人になってくれるという。明治大飯店の脇道から新しくできた坂道を、息を切らしながら歩いたが、先導する2人について行くのが無理な状況になってきた。持っていたスマホを若者に託し、そしてついにお墓の発見になるのだが、お墓ではなく「弔魂碑」であった。

表側は 弔魂碑 麟平書

裏側は 明治四十四年二月

二十五日 殉難

故台中庁警部 原猪治

故台中庁隘勇 寥

故台中庁隘勇 ヤボノーナン

昭和八年二月二十五日



弔魂碑

有志建立

やっとこさ見つけ出した！

明治四十四年（1911）二月二十五日が殉難事故で日本人警部原猪治と隘勇（原住民との境界警備員）原住民二名が死亡したのを、23年後昭和八年（1933）二月二十五日に有志たちの手で、この弔魂碑は建立されたようだ。1930年10月には有名な霧社事件があつて、2年半後この弔魂碑が建立されている。日本人の警部と二名の原住民の隘勇がどのような事件にかかわって死亡したかは、今の時点では分からない。

しかし、「弔魂碑 麟平書」に手がかりが有りそうな気がしてくる。

麟平とは大津麟平（1865（1939）なり。肥後国出身台湾総督府官僚・県知事等。1896年（30歳）台湾総督府に転じ、台南郵便局長、台南県内務部長、台南警察部長、総督府秘書官等歴任。

1908年6月 警視総長

1909年10月 蕃務総長に任

じられる。

1911年（明治四十四年）二

月二十五日 事件当日

1913年6月 病で台湾を去

る。

1914年10月（49歳）理蕃策

原議を発売

1906年4月、第五代目台

湾総督佐久間左馬太就任以後台

湾原住民に対する引き締めが強

くなってきたようだ。1913

年病によって台湾を去った理由

は疑問を残しているように思え

る。理蕃策原議に回答があるよ

うだ。また、ネット検索の結果

「大津麟平伝」大津紀夫著もこ

の弔魂碑の経緯をひも解く重要

な鍵のような気がしてきた。

旅行記

海南航空で行く北京旅行記

1日目（6月24日）

羽田国際空港に午後11時過ぎに着き、出国検査をへて搭乗する。搭乗した海南航空は欧米路線を持つ中国の優良航空会社で、深夜便でも上等の機内食、ドリンクサービスで定評があるという。搭乗開始は直前の1時50分。ところが1時間も待たされ、午前3時過ぎようやく出発。北京空港に5時45分に着く。税関検査、入国検査後、7時近くに空港出口に出る。四川人の張晗さんとその叔父さんの出迎えを受け、叔父さんの自家用車で北京南方30km「宋家庄」のホテルへ。ホテルのチェックイン時間は通常午後3時だそうだがホテル側の配

慮で9時過ぎにチェックイン。ホテルの食堂で朝食後、近くの便利店で冷えた青島麦酒と哈爾濱麦酒を購入し飲んだ後、飛行機で全く「眠れなかった」ため「爆睡」する。

2日目（6月25日）

2日目は、前日地鉄駅近くの高級「手作りパンの店・好利来」という全国展開のチェーン店で買ったパンで朝食。価格も日本なみに高い。味も日本以上にうまい。本日は訪中の第一目的である張秀閣さん（日本に留学した大学院生）に会うために、北京の南の郊外、地鉄房山線「大学城」に向け出発する。10号線（外環状線）から9号線へ乗継いで、約1時

間半の道程である。朝7時半に出発し房山線「広陽城」駅に9時近くに着く。出迎える張さんの案内で9時発「中国社会科学院」の専用バスで大学院に着く。

この大学院大学（中国社会科学院研究生院）は今年9月から学部生（4年制）が入学することにより、「中国社会科学院大学」に生まれ変わる。これまでは中国の文系シンクタンク「中国社会科学院」を母体とするレベルの高い少人数の大学院大学であった。本年6月初旬に行われた「全国統一入試」で理系のシンクタンク「中国科学院」は既に学部を開設し運営している。中国社会科学院大学も募集をはじめ、「全国統一入試」合格者は今年9月か

村田嘉明（会員）

ら学部1年生が入学してくる。統一入試の合格点数は高レベルの水準と予想される。

昼過ぎ6号線で「平安里」3星ホテル「護国寺賓館」へ。西城区の中心地で梅蘭芳故居や郭沫若故居や胡同に近い。



6号線車内。スマホに熱中



9月開校間近の学部棟



2017年9月から「中国社会科学院大学」

ホテルを9時前に出て、地鉄「宋家庄」から5号線で7つ目「灯市口」で下車し中国婦女旅行社日本部を訪問。担当の趙芳さんと7月末の「善隣中国旅行」の打ち合わせ。同旅行社事務所で両替した人民元で、北京での宿泊費、車両代を支払い「領収書」を受け取る。11時半に私とカウンセラーパートの張晗さん（四川人）と趙芳さんで王府井の途中の胡同の「四号院」にある隠れ家的料理店

その後、地鉄6号線「平安里」から「朝陽門」で乗り換え2号線（内環状線）「東四十条」で下車し、7月の善隣中国旅行の夕食会場「四季民福」烤鴨店へ。一帯は中国の行政機関（外交部・文化部）もあり落着いた街並み。「四季民福」烤鴨店で料理と麦酒（バドワイザー）を注文し、カウンセラーパート張さんと歓談する。

3日目（6月26日）



張秀閣さん、村田、張晗さん（四川人）

「圓鑫餃子館」へ。包みの大きい「大箔餃子」や「回鍋肉」などの味を堪能した。冷えた「燕京啤酒」で、喉を潤す。その後、徒歩で王府井の王府井書店に行き、北京地鉄の路線図を購入した。書店近くの地鉄1号線「王府井駅」から「東单」乗換え5号線の終点駅「宋家庄」に着く。駅近くの超市（スーパー）で明日の朝食のパンと牛乳と哈爾濱啤酒を買い、ホテルに戻る。この日の北京は30度を超える

訪中以来、天気は快晴が続き暑い。ホテルを8時過ぎに出発し地鉄・奕庄線「宋家庄」駅から8つ目「榮昌子東街」で下車し、駅前で北京麋鹿生態実験中心の張さん（26歳）の車で「四不像センター」へ向かう。9時過ぎ、広大な敷地の「南海子

る暑さですぐシャワーを浴び休息する。

4日目（6月27日）



北京の胡同（護国寺賓館前）

郊野公園」に入り「四不像セ
ンター」へ着く（「四不像」の
写真は裏表紙下段に。また「四
不像」の説明は「みんなの写真
館」に）。1年前、訪日し善隣
交流会に参加した研究員の張
樹苗さんと陳星さんと再会を
果たす。会議室で白加徳氏（セ
ンター主任、高級政工師）と1
年前訪中時の友2人と歓談後、
電動カートで四不像園内を回
遊し写真を撮った。一般中国人
の立入禁止区域も案内しても
らった。その後、北京南海子
麋鹿苑博物館で1985年開
館以来の歴史、ドイツ人の四
不像研究・収集家の寄贈展示
物等を見学する。展示物のデ
イスプレイは日本以上の展示内
容であった。博物館を見学後、
職員食堂で中国料理とスイカ
やヨーグルトのデザートをお
馳走になる。食堂では日本語
の話せる女性職員（北京・国
際関係学院大出身・中国共産
党中央党校に近いキャンパス）
と日本語で交流する。



地下鉄駅前の護国寺賓館

夕刻になり地鉄の八通線「伝
媒大学」駅から1号線「王府井」
で下車し、駅前の北京飯店前
の中国銀行で日本円を人民元
に両替する。当日換算レート
は幸運に「円高」で1人民元
＝17円近い「高レート」であっ
た。

その後、中国銀行店舗前の
大型商業ビル7階の「孔乙己」
に移動する。2年前、北京旅行
（2015年6月）で中国社会
科学院日本研究所を訪問し知
り会った研究員・周曉娜さん

と孔乙己（魯迅の小説に登場）
店内で再会する。料理は浙江
料理で味はすこぶる美味しい。
鰻・東坡肉、鍋料理、空豆な
ど満足した。周曉娜さんは1
年前、中国社会科学院日本研
究所から北京市発展・改革委
員会に転職し、委員会の経済
研究部で論文作成など研究活
動に注力している。同委員会・
経済社会発展研究所の男性研
究員、霍景東さんも同席し霍景
東さんが現在フィールドワー
ク研究の「砂漠地域の米作の
土壌改良」について議論した。
内モンゴル自治区通遼市の沙
漠地の米作現場写真を見せて
もらう。

夕食会を終え、周曉娜さん
と霍景東さんと北京での再会
を約束し別れる。

地鉄「王府井」1号線から「東
単」乗り換えて5号線「宋家庄」
下車、ホテルに向かう。途中、
便利店で「雪花麦酒」500m
lを購入。この日も暑く、ホ
テルに戻るやすぐシャワーを



地下鉄・東四十条駅

浴び、「雪花麦酒」を一気に飲
み干す。

この日、午前中、北京麋鹿
生態実験中心・北京生物多样
性保護研究中心の「2研究員」
と再会を果たせた意義は大き
い。北京の南方（北京市大興
区南海子麋鹿苑）の実験セン
ターを訪問できたことは幸運
であった。

5日目（6月28日）

旅行荷物をまとめスーツ



北京烤鸭店

ケースに格納する。

午後3時半過ぎ、カウンターパートの張さんの叔父さんの自家用車で北京首都空港第二ターミナルに移動する。北京市内は夕方、渋滞が激しいため早めの出発となった。5時前に北京首都・空港第二ターミナルに着き張さん、叔父さん夫婦と別れ海南航空受付に移動する。

今回の北京旅行は宿泊ホテル（大興区宋家庄）と飛行場との往復を北京人の叔父さん

のクルマで送迎してもらい感謝する。

往復利用した海南航空（本社・海南省）は中国の新興成長航空会社で、深夜便でも豪華な機内食・機内サービスがあり帰国便では冷えた「燕京啤酒」を飲み、眠りにつく。機種はボーイング737で左右3席の中型機であった。

今回の北京市内移動はタクシーを1回も使わず、すべて「北京交通カード」で北京地鉄を利用し移動した。世界でも地下鉄延伸距離では北京・上海が世界一である。発展著しい中国の成長を体験できた。また、市民レベルで「草の根・国際交流」できた意義は大きい。

私は日中戦争終戦前に中国東北部で生まれ（長春市）第二の故郷は中国である。

訪中前まで北京は豪雨が続いたそうだが、6月24日から5日間は好天が続き快適な旅行だった。



四季民福店内

1年中で6月が一番「北京の空気」がよく、マスク着用の市民は1人も見かけなかった。北京の「空」は青かった。今後も中国の友人との国際交流を続けたい。

今回の旅は北京の友人との再会、カウンターパートの四川人の張さんと4年振りの再会し、張さんの日本語通訳で効率的に訪中日程を消化できた。張さんありがとう。張さんは同じホテルにもう1泊し、翌日、

四川に帰郷した。9月からは大学院生として北京生活が始まる。

〈解説〉

24ページ、張秀閣さん（中国社会科学研究院研究生）は2015年6月会員交流行事「善隣東京湾クルージング」参加者…2015年8月、国費留学を終え中国に帰国した。

故・大江哲氏の厦門大学短期留学時代からの友人。

私は協会国際交流委員会の委員として「中国との国際交流」を通じ、日中友好の懸け橋として注力したい。

本年2017年9月は日中国交正常化45周年の記念すべき年にあたる。今回の個人旅行は中国の友人との「再会交流」が主だが、7月下旬に実施された善隣…日中国交正常化45周年北京市・甘肅省訪問の旅（参加者13名）の北京訪問先の「下見」と「見学」を兼ねた。

コラム

腰折れ文 一、

渡邊澄子（会員）

第一回は何を書こうかな。東京の猛暑を逃れて七月十二日から五日間女神湖畔の別荘に行ってきた。ここは俗化された白樺湖畔とは異なり、静かで風光明媚な快適な地なので、往復約三五〇キロの道程を一人での運転も苦にならない。友人たちは、高齢者運転は危険だからもう止めよ、と口繁く忠告してくれるが、車無しでは不便だし、ここを処分してしまう気になかなかなれない。ついこの間免許更新で他の七〇代男性たちが七〇点位だったのに対して私一人が九〇点の「優良」で褒められたのを威張ったら友人からやつぱりもう止めろと言われてしまった。

この別荘は、別荘なんて高嶺の花だったのに、長くなるので省くが、その気も無いのにマンガ

チックな形で買うことになってしまったのだ。もう三〇年前のことである。四〇〇坪の土地に春はレンゲツツジが一面に咲き、三五本の白樺の大樹、やまぼうしの白い花等々、庭から摘み取った山菜の天麩羅も乙だ。今回は樺太旅行の事前勉強の意味もあった五〇二頁もある李恢成の記録文学『サハリンへの旅』を読み切ってきた。李恢成は真岡（現ホルムスク）に生まれ、樺太・サハリンから北海道に引き揚げてきた作家だ。作品も人物も大好きで「李恢成論」も書いている。一緒に飲んで帰りは家まで送って貰ったこともある。戦後三四年経ってやっと果たした長年の願望だった「パルチャ（運命）の旅」を詳細に記録したもののだが、『国民文学』論その他で、ここ数年来、日本

の「負」の歴史の検証を論文として書き続けている私にとって大日本帝国の侵略の歴史とこの本は繋がっていて改めて多くの知識を得られた。大好きな矢田津世子が「チエホフに学べ」と自己叱咤した日本文学に影響大のチエホフの文学館に樺太旅行で行きたいなあ。

山荘滞在が長いほど帰宅後が大変。お金もないくせに『朝日』『東京』『琉球新報』三紙を視点の比較上とっていてそれに眼を通し必要部分を切り抜く作業に二日はかかる。山で見るテレビのニュースの情報はなんとも薄っぺらだ。

この五日間は「加計」問題と中国の民主活動家劉曉波氏の危篤から死迄の記事に溢れていた。中味は真逆だが怒りにとらわれた。森友問題はどうかってしまっただろうか。「教育勅語」を園児に唱和させるなんて呆れて言葉もない。戦争への道に進んだ根源なのに。首相はこの教育理念に賛成。バツカじゃないか。

原稿・写真など大募集

会員の皆様から、原稿・写真などを幅広く募集いたします。

○「みんなの写真館」

表紙および裏表紙の写真や絵画などを募集します。写真についての短いコメントも付けてください。思い出の写真、珍しい写真、力作の写真、ペット自慢、お孫さん自慢なんでもお待ちしています。

○「旅行記」「体験記」「書評」

「詩」「小説」など

多様な原稿を募集いたします。

○9月号より、編集部体制で「善隣」誌の編集に当たります

会員の皆様にできるだけ参加していただけるよう試みていきます。原稿の長さ、書き方、方法等お気軽にご相談ください。事務局にお伝えいただければ、追って編集部からご連絡をさせていただきます。

（編集部）

陶々俳壇

兼題「立秋」顔

◎上腕式血圧計秋立ちにけり
雨つる佐渡によこたふ天の川

鈴木南山

サービスエリア立秋の佐渡を向く
海を眺むる湯上がり白餅

橋本紅杓

◎秋立つや祇園豆腐の焼き上手
祭笛吹く子らの顔みな清し

大内善一

おもひだす若き我が顔日焼けがほ
◎九十年を過ぎし齡や走馬燈

佐藤若杉

夕顔や薄暮のなかの白一輪
◎全集の一冊欠くる鷗外忌

戸部まもる

◎楼門の彫刻仰ぐ蝸牛
参道へ沢蟹迷ひ出でにけり

岡和水

◎はらからを遠くに思ふ秋刀魚かな
秋刀魚輝くスーパの皿の上

長野宏太

線路一本立秋のど真ん中
梅干すやいつの間にやら母のかほ

馬場由紀子

◎◎由紀子選

選後評

馬場由紀子

どくだみの香り籠めたる勝手口

紅杓

どくだみは乾燥させ、葉草として使われる。煎じたら健康茶。そのまま網に入れて湯船に浮かべたら入浴剤。繁殖力旺盛などくだみを刈って勝手口に積んであるのだから。香りがこちらにも漂ってくるようだ。

睨めっこ玉の汗噴く顔と顔

南山

さて睨めっこをしているのは誰だろう。小さい子が二人で睨めっこは可愛いいもし、大人の大人だったら、意外性があって面白い。そして、その汗は、きつと切なく辛く、深い味がするに違いない。

立秋や短く揺るる庭の草

若杉

鬱蒼と茂る夏草との闘いも終焉を迎えたようだ。草丈も短くなり立秋の今日は、風に穂先を戦かせている。日本には四季がある。そして私たち日本人は四季を敏感に感じることが出来る民族である。

透き通る流れに映る山女かな

和水

溪流に遊び、涼しげな夏休みを御過ごしのようだ。神聖にして涼やかな山風を身に受け、目は豊かな翠を染しみ、耳はせせらぎの音に興じている。ふと清らかな流れの中に山女の影を見つけた。

向日葵畑新しき顔のあり

宏太

最近向日葵畑を観光の目玉にしている処が増えてきたようだ。元来は畑の堆肥として役に立っていたものなのだから。普段からこの畑を築きむ作者は、新しく咲いた向日葵の顔を見つけた。

草刈りぬ原の向かうに牛舎据ゑ

まもる

この草刈りは牛のため。牛の餌の牧草を刈り、乾燥させたものや発酵させたものを蓄えておく。遠くに見える牛舎からは、まるで牛の声が聞こえるかのようだ。楽しくも力強い句である。

光太郎詩碑読み返すとき閑古鳥

善一

九十九里だろうか。千葉の房総はかつて、多くの文化人が訪れた。光太郎は妻の智恵子の療養していた九十を毎週のように訪れていたらしい。自然豊かな房総の景が見えてくる。

月日と苗字

戸部 守

若い頃、記録員として高校野球に携わっていた関係からか、人名にはすぐ興味がありました。なにしろ夏の大会には百校以上が出場し、しかも現在と違って野球人口も多かったため各チームとも定数いっぱい選手登録をしてくるのです。毎年千五百人以上の名前を確認するのです。

最近になって、「日本人のおなまえっ！」というテレビ番組も大変興味があります。

これから挙げるのは、季節に密接に関係がある苗字です。

四月日：「わたぬき」と読みます。寒い冬に来ていた綿入れの綿を抜くという意味です。衣更えを意味します。余談になりますが、四月日は中国では「万愚節」といいます。言い得て妙です。

八月日：「ほずみ」と読みますのはさあ今日から穫り入れ時期になりましたよという意味が込められています。

十二月日：「はすだ」と読みます。十二月は「しわす」です。私の郷里茨城の霞ヶ浦ではこの頃になると、斉に蓮の収穫が始まります。

三つとも別な漢字にすれば、よく知られる苗字です。でもこんなところに日本人の季節観が感じられ、面白いものです。

常任委員会報告

環境委員会 活動要旨

7月3日(月) 15:40~16:50、8人の委員で開催。今回は同日に、臨時フォーラムとして環境省の井上直己課長補佐の「中国の環境問題」の講演があったため、委員会は講演終了後に開催した。定例のテーマとして、善隣協会内のIT整備、エネルギー資源、日本漁業の現状について意見を出し合った。さらに、見学会の企画、委員会名称の変更なども討議された。また、常任委員会と各会員の関係活性化についても検討した。8月は公式には休会するが、委員の都合次第で、任意の茶話会開催を行うことにした。

(委員長・牛木久雄)

国際交流委員会 活動要旨

7月13日14:00~開催。初めに、『さくらサイエンスプラ

ン』事業の進展状況が報告された。平成29年度第2回目の申請は、「中国医科大学訪日団」という医療関係プロジェクトであり、6月末にJSTに申請書を提出した。千葉大学他の訪問先のアレنج状況についても報告があった。次に、旅行関係団体との提携事業に関する報告があり、先方が教育関係と生産ライン見学の要望を検討しており、より協力関係を進めていくことが話し合われた。また、7月下旬で実施する中国ツアーの実施内容の確認を行なった。最後に、6月に中国を訪れた委員長より中国の最新事情を報告した。

(委員長・姜晋如)

講演委員会 活動要旨

まず、皆様に、お願いします。良き講師、良きテーマを、皆様の人脈からご紹介ください。我が国自身を理解するテーマ、中国、アジア諸国、そして世界を理解する講演を求めます。時には、文化・娯楽・音楽も歓迎さ

れます。また、会員の皆さん、講演会にはできるだけ参加してください。公益を追求する当協会にとって、講演会は重点的な事業です。それで、「公開」講演会と称し、安価な参加費で、会員の他、広く社会からの参加者を歓迎しています。各月の第1木曜日3時40分に講演委員会を開催しています。つまり、月初の講演会の終了後に開き、小一時間続きます。原則、委員長の判断で会員誰でも参加して結構です。講演内容を「善隣」誌に掲載することが多いゆえ、ここ3年は、講演委員会と広報委員会を合同で開いています。定例として、直近号の「善隣」誌につき意見交換を行います。講演委員会の重点目的は、入手情報ベースに議論をしての、次月・次々月の講師・テーマの決定です。この決定事項は善隣誌33ページの「〇月の行事予定」に掲載しています。ご覧ください。

(委員長・村瀬廣)

広報委員会 活動要旨

広報委員会は、「国際善隣協会」の広報活動について方向性とその方法などを検討し、広報誌「善隣」「ホームページ」などに対する意見を聞き、検討することは今までどおりですが、9月号から「善隣誌編集部」体制になりました。「編集部」は、執行部役員と広報委員長・副委員長、編集実務者で構成し、執筆者・原稿等の決定、原稿の確認・管理等を行っていくこととなりました。

「善隣」誌は、従来の論文掲載のほかに、一人でも多く会員の方に参加いただくこととし、原稿執筆、表紙等写真のご提供、そのほかの作品など、幅広くご提供・ご協力をお願いしていくこととなりました。また、理事会・各委員会の活動報告を掲載していきます。そして、講演会などのお知らせを前月末までには会員の皆様にお届けできるように、編集作業日程を10日ほど繰り上げました。ご協力のほ

どお願いいたします。

(委員長…原田克子)

東北委員会 活動要旨

6月28日、会長以下6名が集まり、東北委員会を開催した。今回は、新メンバーである加藤紘捷氏、瀬崎明氏を迎えて初めての委員会である。前委員長の藤沼氏より、これまでの東北委員会が実施してきた活動内容・沿革を話してもらい、今後の進め方を討議した。現在は、早稲田大学大日方教授の『近現代史講座』を東北委員会が裏方を務めて推進しているが、これは来年の6月まで続く計画である。毎回、活発な質疑が出て、大いに出席者の賛同を得て活況を呈している。一方、10月以降、「満洲」に関する講演会で、推薦する人(内容)があれば、提案してもらおうと各自アンテナを張ることを申し合わせた。

(委員長…戌亥芳秀)

協会通信

理事会のご報告

9月号の『善隣』の原稿の締めは、これまでより少し早まり2か月前の7月20日でした。この時点での理事会議事録は6年度の理事会の内容であります。今後も、時間的なズレが、どうしても生じますが、定例的に「理事会で今何が話し合われているか」を中心に情報を伝達していきたいと考えます。したがって、7年度の理事会内容については、10月号の『善隣』に載りますので、宜しくご高配下さい。6月号の内容は、8月号に掲載しました。

学術顧問会議開催

7月5日、協会5階会議室において、初めての学術顧問会議が開催されました。今年度から学術顧問に就任された矢吹晋

問、田畑光永顧問、高原明生顧問、松重充浩顧問の4名が参加され、今後の活動方針について、協会執行部と活発な意見交換を行いました。特に、会長からは「会員のために、年に1回または2回、フォーラムの形で研究されている成果を聞かせてあげてほしい!」との要望を出しました。先生方も、会議の内容や要望について、前向きに受け止めた発言がありました。

「暑気払い」開催

昨年は、「引揚70周年記念の集い」の決起集会のような形で実施しました。今年は、これを「暑気払い」として恒例化しようとして試みましたが、酷暑のせいか、参加者は23名と若干少なめでした。それでも藤原、成田両顧問もお顔を見せてくださり、冷たいビールとモンゴルの強いウオッカをチビリと味見をして歓談の輪が広がりました。一方、昭和の時代の歌が多いカラオケでしたが、こちらのほうは

大いに盛り上がりを見せていました。(写真・表2に掲載)

長寿祝賀会のお知らせ

9月14日(木)12時より、新橋亭新館にて長寿祝賀会を開催します。会費は5000円。参加希望の方は、事務局までご連絡ください。

〈本年度長寿者〉
(敬称略・生年月日順)

【米寿・昭和5年生まれ】伊東明、伊藤正博、他1の3名

【喜寿・昭和16年生まれ】土屋民雄、伊大知重男、牛木久雄、藤木英夫、福島靖男、の5名

「碁盤」を譲ります!

善隣協会70年の歴史の中で、眠っている碁盤が、貰い手を探しています。現在7面ほど5階のロッカーの中にあり、希望者には無料(但し、送料は着払い)で進呈させて頂きます。ご希望の方は、9月末日までに、事務局へ申し出てください。

(事務局長…藤沼弘一)

会員だより

新入会員
正会員

内藤祐太氏
1名(非公開)

同好会だより

「一石会」8月囲碁例会優勝
田畑光永氏

(お詫びと訂正)

7月例会優勝は、遠藤文夫氏でした。

お詫びして訂正いたします。

「謡曲会」

9月19日例会 実施予定曲目

曲目	役	割	地頭
鶴亀	シテ澤村	ワキ土屋	鶴川
経正	シテ鶴川	ワキ澤村	神保
船弁慶	シテ神保	ワキ鶴川	堀野
	ツレ土屋	ワキツレ澤村	

「善隣中国塾」開講

本年1月にスタートした中国塾の「河殤会」は予定通り、5月に閉講となりました。10月から矢吹晋氏を中心として、現代中国をテーマとする勉強会「善隣中国塾」を開講します。

・目的：現代中国の政治、経済、文化などをテーマにし、担当講師等による問題提起の後、質疑応答、意見交換などを自由に行うゼミナール風、全員参加型の「中国塾」とします。会員以外の人、特に若い人が多数参加できるように開催日は毎月、プレミアム・フライデーとします。

・日時：月末金曜日

16:00～18:00

※第1回 10月27日(金)

・場所：当協会5階会議室
・講師：矢吹晋氏(学術顧問)
・教材：『習近平の夢』

矢吹晋著、花伝社2700円

・受講料500円(学生は無料)

希望者は事務局・福富まで。

(世話人：日野正子、岡部滋)

みんなの写真館

生まれたばかりの小鹿(表紙)

こんにちは。ご無沙汰です。

協会から講演会のメールが届き、こちらのニュースもひとつ届けます。ここはニュージャージー州のミッドランドパーク村。人口5000人の大いなる田舎です。のんびり過ごしています。そこで庭の片隅に、生まれたばかりの子鹿を見つけました。元気に育つことを祈ります。

(佐藤嘉信)

サンゴ礁(表4左上)

飛行機から眼下のサンゴ礁を撮りました。沖縄のエメラルドグリーンの海を見たくて、梅雨明けした7月中旬を選びました。

好天に恵まれ、平和祈念公園、海洋博公園からもエメラルドブルーの海を望むことができました。

(日野正子)

ギンリョウソウ(表4右上)

長野県諏訪大社の御柱を育てている森に入ると、気が付けばそこらじゅうに、白くふんわり

と頭をもたげていました。踏みつけないように撮りました。ギンリョウソウ(銀竜草)は、シヤクジョウソウ科の多年草。腐生植物としては有名なもので、光合成をしないため真白です。別名の一つにユウレイタケというがあります。

(原田克子)

四不像(表4下)

北京四不像実験センターで撮った写真です。写真を撮った位置が湖面を隔てた道路からだったため、四不像が小さめです。中国政府が、生物多様性保護の観点から北京郊外の広大な土地に希少動物・四不像を飼育しています。

シカのような角をもちながらシカでなく、ウシのような蹄をもちながらウシでなく、ウマのような顔をもちながらウマでなく、ロバのような尾をもちながらロバでない、四つの動物に似た特徴をもちながら、いずれとも異なるために「四不像(スーブシャン)」と呼ばれます。

(村田嘉明)

2017 年 9 月の行事予定

- 1 日（金）14：00 近現代史講座
- 6 日（水）13：00 俳句会
投句の場合は兼題「台風、神」及び当季雑詠
- 8 日（金）11：00 一石会囲碁例会
- 12 日（火）14：00 謡曲会（松木先生稽古日）
- 14 日（木）12：00 長寿祝賀会（於 新橋亭新館）
（参加希望の方は事前に事務局までご連絡ください。）
- 14 日（木）15：00 ○公開フォーラム
「近代国家の成立と地質学」
神谷英利氏（京都大学名誉教授）
- 19 日（火）14：00 謡曲会例会
- 21 日（木）18：30 公開アジア研究懇話会
「香港返還20年を振り返る」
遊川和郎氏（亜細亜大学教授、アジア研究所）
- 26 日（火）14：00 謡曲会（松木先生稽古日）
- 28 日（木）14：00 パネルディスカッション
「日中国交回復45周年—国交を実現した力」
会員専門家、経験者による

9 月の会議予定

1 日（金）14：00 東北委員会	12 日（火）14：00 国際交流委員会
1 日（金）16：00 講演委員会	13 日（水）14：00 財政委員会
" 16：00 広報委員会	21 日（木）14：00 理事会（第10回）
4 日（月）14：00 環境委員会	27 日（水）11：00 顧問会

会員外一般聴講者の参加費は、 印：1,000円、○印：500円、無印：無料
下線は通常日程に変更あり

